

ようこそ、パラレル・トラベルへ

僕らは、じぶんの身体や、この時や、いる場所について、
一体どれだけのことを知っているのだろうか。
いつだって僕らは、いつかの誰か、どこかの何かと繋がって
いる。高鍋という場所は、そのことを強く訴えかけてくる場
所だ。不思議な古墳群の風景は 1,500 年以上もの時と空間を
遡ることができるし、特産の焼酎を呑めば、この土地が温暖
な九州であったことと同時に、自然の恩恵や人間の知恵を直
に感じることができる。一方、今や押しも押されぬように見
える宮崎の畜産が 2010 年に大打撃を受けたこと、そこから
どのように復活してきたのかということもまた、誰しもの日
常と決して無関係ではない生きることそのものと結びついた
深い学びがあるのである。

何気無く過ぎてしまう日常が、どのような環境や、人の営
みや、あるいは不安定さや、それを乗り越えようとする人の
強さの上にあるのか、それを僕らは何気ないことの中からど
れだけ感知することができるのか。

感覚と時と空間を旅するプログラム「パラレル・トラベル」
とは、そのような遠くて近い場所や、あるいは最も近くにあ
る非日常への、アートを通した旅と言えるのかも知れない。

展覧会名：
感覚と時と空間を旅するプログラム
「パラレル・トラベル」

ゲストキュレーター：
石川吉典

アーティスト：
山城大督

ご協力いただいた方々（50 音順・敬称略）：
岩田拓朗
大庭圭二
角銅真実
加藤笑平
加藤秀文
亀元由佳
河野製茶工場
耕三寺博物館
耕三寺功三
古賀義浩
新見永治
武田光史
時里充
中西要介（Studio PT）
野田智子
林洋介
フランク・ボーデ
宮田君平
毛利直子
毛利義嗣
IPPONGI PRODUCTION

主催：
高鍋町美術館
本展担当学芸員：青井美保

高鍋町美術館開館 20 周年記念企画

パラレル・トラベル

PARALLEL TRAVEL

感覚と時と空間を

旅するプログラム

Artist:

山城大督
YAMASHIRO Daisuke

高鍋町美術館
TAKANABE MUSEUM OF ART

「パラレル・トラベル」 出展作品

1. 《Spectacle of time》 2019 年 16mm フィルム、ループ上映機

本展のために制作された 16mm フィルム作品。
ループ上映機から円盤状のスクリーンに映し出されているのは、高鍋町に残る持田古墳群に眠っていた副葬品のひとつで、変形四獣鏡（国指定重要文化財・耕三寺博物館蔵）と呼ばれる銅鏡である。山城は展覧会のために高鍋町内を見て周るなかで、茶畑やキャベツ畑が広がる台地に 1,500 年の時を超えて点在する持田古墳群を訪れた。本来ならば光のあたることのない土の中で今も眠っていたはずの銅鏡は、紆余曲折を経て現在は高鍋にはない。今回の展覧会を機に、撮影という形で銅鏡に光を当て、投影するという形でまた空間に呼び出すこと。それは、壮大な「時」を、高鍋で、光の前に顕在させることもある。

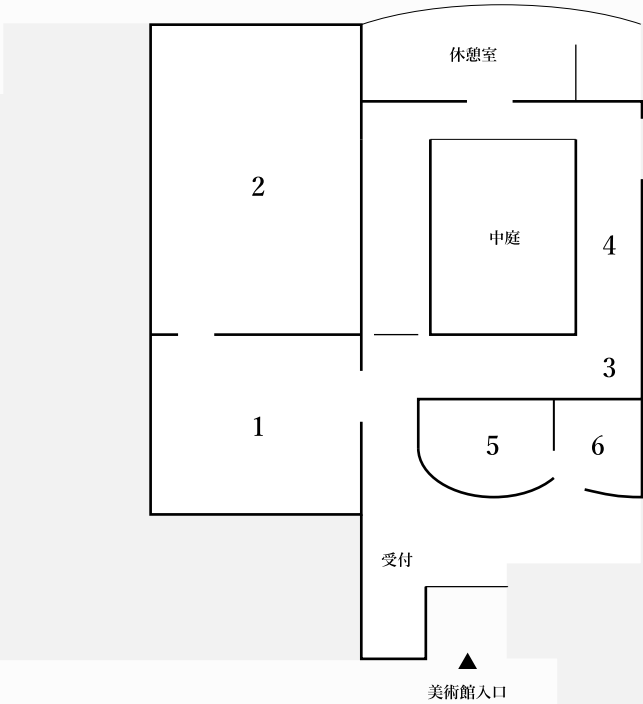
上映技術：フランク・ボーデ（focusfilm16）
協力：耕三寺博物館

2. 《Synesthesia Garden》 2019 年 ミクストメディア

時間の流れの中で作品が構成されている〈Time Base Media〉と作家が呼ぶシリーズの新作。
美術館の企画展示室空間を大規模に使い、音楽家・角銅真実とのコラボレーションによって生まれた上演型インスタレーションの本作は、Synesthesia（共感覚）をテーマにしている。音に色を感じたり、形に味を感じたりするという共感覚。本作では、高鍋の海や古墳、見える山、動物の匂い、宮崎の食の味や、その他、高鍋でインスパイアされた様々なものや、体験から得た感覚が要素の中に混在しているが、それらは共感覚というものが通常と違う感覚として感じられることを指すように、光や音や声に変換されて上演される。ステージの作品と、流れる時間をとおして、その向こう側の光景が見ている人々の中に流れ、立ちあがることを期待している。

構成・演出：山城大督
出演・音楽：角銅真実
上演システム：時里 充（TOKISATO PLAYER）
ハードウェア：岩田拓朗
照明アドバイザー：大庭圭二（RYU）
ビジュアルプログラミング：林洋介
造作・会場設営：宮田君平（MIYATA ART CONSTRUCTION）
設営協力：加藤笑平（ファクトリー玄）、耕三寺功三、古賀義浩、フランク・ボーデ（focusfilm16）
キュレーター：石川吉典
協力：IPPONGI PRODUCTION

展示エリア



3. 《TALKING LIGHTS》 記録映像 2017 年 HD ビデオ、15min

この映像は、2016 年に森美術館（東京）で開催された「六本木クロッシング 2016 展：僕の身体、あなたの声」に出展された山城のインスタレーション作品の記録映像である。
作品は、モノを擬人化させ、登場人物の一員となることを想定している。動きを伴うことによりモノは擬人化され、鑑賞者はシンパシーを感じ、悲しみや寂しさ喜びが生み出される。
私たち一人一人の悲しみや寂しさや喜びという感情は、どこから生まれるのだろうか。「感情の存在しないはずの対象」への「感情移入」は可能なのだろうか。移入された感情は自分の感情なのだろうか。山城は制作当時、そのようなことを考えていたという。
この作品を通して鑑賞者は、「感情移入し、その感情移入を客観視し、〈他者を思うこと〉」を再考する事となった。

監督：山城大督
出演：石垣真帆、新見永治、前田香織、山城世界、大村美結、柿迫渉、田中暁子、長野真央、松本涼乃
音楽：原 摩利彦（Scene.04）、安野太郎（Scene.07）、五嶋英門（Scene.02）、飛谷謙介（Scene..03）
詩：谷川俊太郎「芝生」（Scene.07）
（『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』より 1975 翻訳：W.S. マーウィン、連東考子）
上演システム：時里 充（TOKISATO PLAYER）
ハードウェア設計：岩田拓朗
テクニカルサポート：ひつじ
コンストラクター：青木一将（ミラクルファクトリー）
照明アドバイザー：大庭圭二（RYU）、山下恵美（RYU）
ビジュアルプログラミング：林洋介（Scene.04&07）
音響：鶴林万平（ソニハウス）
英訳：奥村雄樹
英訳校正：グレッグ・ウィルコックス
キュレーター：荒木夏実
プロダクションマネジメント：野田智子（IPPONGI PRODUCTION）
制作協力：株式会社 流、ソニハウス
協力：Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]、ナナロク社、アサヒ・アートスクエア、川合健太、萩原健一、松本美枝子、山本千愛

4. 《行為と記録Ⅱ》 2019 年 写真、石

これは、高鍋の鳴野の浜で無数に転がっていた石と、その石を空に投げ、アーティストの山城が記録したものである。

何時のものとも、何処のものともわからないような石が、「不自然に」宙に浮かんでいる写真は、誰かが投げた行為の記録である。しかし同時に、この、記録するに足るかすら疑問を持つような特別ではない行為を記録することで山城は、むしろこれ以外の、日常に無限に存在する行為や記録というものの意味を揺さぶっている。

5. 《センサリー・メディア・ラボラトリー》 2018 年～

ここにある一つ一つの物、それ自体は作品とは呼べない。あくまでも、ラボラトリーとしての体験空間であり、作家にとっては実験空間でもある。
この場所で、紙に書かれた作家からの単純な指示を、素直にその通りにしてみる。その時、自分が知っている感覚を覚えることもあるだろうが、忘れていた感覚や、知らなかったけれどずっと前から自分が持ち合わせていたセンサーに、あらためて出会うこともできるかもしれない。

6. 《Hello Everything》 2012 年 HD ビデオ、5min

この映像作品は、音楽家・蓮沼執太氏の音楽作品、《Hello Everything》のミュージックビデオとして制作されたものである。人工的な都市（おそらく東京であろう）の中を、いくつかの色の風船が、空へ、高く、のぼっていく。「Hello Evetything」という言葉や色々な風船は楽しいな雰囲気をおわせる一方で、都市の中を揺られ、どこへ飛んでゆくのか、どこか心許ない。
独特な二面性を持ち合わせた浮遊感は、それが東日本大震災後の 2011 年下旬というタイミングで制作され、2012 年 1 月 1 日にリリースされたことと、決して無関係ではないだろう。

映像：山城大督
音楽：蓮沼執太